市制 75 周年　桜の森公園・春まつり～広がれ平和の輪～が開催される

劇団ユニット・ブリュージュ

今年は例年になく桜の開花が早く、音楽とお話による「桜の森公園・春まつり～広がれ平和に足を運んでくださった市民のみなさまや市民の会の仲間には心から救われる思いがしました。

「劇団ユニット・ブルージュ」のピアノ・広光美絵さん、歌・神田麻衣さんによるオープニング演奏は、元劇団四季の神田麻衣さんの素晴らしい歌声により、「Ｉmagine」他４曲を熱唱していただき、寒さも吹き飛ぶような熱い演奏でした。「春まつり」の趣旨に賛同して手弁当で東京から駆けつけてくださったお二人には心から感謝いたします。

開会式では、共同代表の竹内宏行が初めて開いた今回の催しの意義について代表挨拶。続いてモニュメント『地-天』の作者、三村力先生の紹介と挨拶、浅尾悟先生による「鈴鹿海軍航空隊について」のお話がありました。このあと、モニュメントなどの立つ戦争遺産ゾーンに移動し、モニュメント、残された正門や番兵塔を前に、三村先生と浅尾先生から改めて話を聞きました。三村先生は「４本の柱は取り壊された格納庫の柱を、らせん状の輪は飛ぶ飛行機と平和の輪をイメージした」と語り、浅尾先生は「偵察兵などの教育訓練施設だったが、戦況が悪化していった終戦間際には戦地に飛び立つ航空基地になった」と歴史を話されました。「とてもいい話だった」と多くの人から感想が寄せられました。

【モニュメント前で話される三村先生】

午後からは、アコースティックライブの演奏があり、出演のみなさま方の熱演に、満開の桜の花の下で聞けたらと残念に思いました。鈴鹿市観光物産協会にご協力を頂き８店舗の出店と AGF の温かいコーヒーを振る舞うことができました。

「春まつり」開催に当たっては、音響機器搬入や会場設備・テント・椅子・机等、団体や多くの人にご協力を頂き、当日はスタッフとして強い風の寒い中、事故の起きないように懸命に働いてくださったみなさまに助けられて無事終了することが出来ました。

市民の命を守る防災公園に、平和を願うモニュメントが完成して３年。悲惨な戦争の歴史を風化させてはいけないと市民の会が組織されて 10 年。この節目の年に開催された「桜の森公園・春まつり」に大きな意義があったと思いました。

第 10 回総会開く　春まつり、部材の移転など報告

【議事提案を行う竹内共同代表】

鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会は２０日、ジュフリーすずかで第１０回総会を開きました。出席者は３０人。初めて企画した「市制７５周年　桜の森公園・春まつり～広がれ平和の輪」の開催、鈴鹿市の文化財倉庫に保管してもらっていた格納庫の部材の移転などの活動報告をし、続いて、平和資料館開設への取り組みをはじめとした活動計画、予算、新役員の提案を承認していただきました。津市在住の同人作家、竹内令さんに「鎮魂の旅―いくさに翻弄された親きょうだい」と題して記念講演してもらいました。

鈴鹿市から保管を１年延長してもらっていた格納庫の部材は３月１１日、会員の森田英治さんのご厚意により、文化財倉庫から森田さんの敷地内の建物に移すことができました。今後、事前に市民の会と森田さんで日時を調整して希望者の見学ができるようにします。

「桜の森公園・春まつり」について、出席者から「参加したが、すばらしいイベントだった。桜がよければ、もっとたくさんの人が来てくれただろう。定期的に開催できればいいと思う」という発言がありました。どういう形で続けていくか検討していく考えです。市の空き施設を使わせてもらって平和資料館に、という市民の会の要望に対し、鈴鹿市から「公共施設等の総量規制に取り組んでいることから、新たな施設の建設や既存施設の転用は困難な状況です」という回答があったことを報告。私たちが求めている「公設民営」の平和資料館の実現は容易ではありませんが、粘り強く市に働きかけていく方針を示しました。

【森田さん宅部材保管状況】

竹内令さん記念講演「鎮魂の旅―いくさに翻弄された親きょうだい」

以前からみなさまの活動は存じあげていました。１０周年に声をかけていただき光栄です。一人でも多くの人に戦争のむごたらしさを伝えていく。それが生かされてきた者の役目だと思ってお引き受けしました。

鈴鹿海軍航空隊ができた１９３８年は私が小学校に入学した年です。そして高等科１年のとき終戦となりました。航空隊の歴史と一緒です。若い命がどれだけ失われたことか。胸が詰まります。跡地にできたモニュメントに合いに行きたい。みなさんが戦争遺跡を保存して平和利用を目標に掲げることに感動します。私は戦争の体験を書き残してむごさを訴える。みなさんと同志です。戦争は始めたが最後、やめられない。行きつくところまでいく。原爆が落ちるまでやめられなかった。

長兄は私が小学１年のとき、中支に出征、７年近く従軍して終戦の１２日前に戦死しました。高射砲隊にいて米軍に直撃され、爆風でやられた。友だちが両親に持ってきた遺品の中から預金通帳が出てきた。通帳は生きて帰るつもりだったことを表しています。

二番目の兄は南太平洋の小さなサンゴ礁の島で戦死。昭和１９年２月に部隊は全滅していたが、戦死公報が届いたのは終戦後。親はもう帰ってくるかと待っていたのに、１年半も前に死んでいた。昭和１９年前後のニュースを調べたが、「勝った、勝った」というニュースばかりでした。

姉は日赤看護婦として召集され、千葉県の陸軍病院で終戦を迎えます。精神科に配属された。軍隊に入って気が違った可哀そうな人がたくさんいた、といいます。

三番目の兄は満蒙開拓青少年義勇軍に応募して昭和２０年６月に渡満します。東京空襲のあとです。行く途中の神戸は燃えていた。昭和２１年秋、運よく帰国して実家の寺を継ぎました。私は津市の空襲に遭いました。両親は焼夷弾の火を消すため、寺に残りました。

私は弟と妹の手を引いて西の山に逃げた。一晩中、津の街は燃えていた。本堂には焼け出された家族が何人来たか分からない位いました。

母は「二人を取られた」と何べんも言う。そのたびに父が「言うな」と叱る。両親はそんなやりとりをずっとしていました。そんな母に「お母さん、いっぺんでも戦争に反対した」と言いました。そうしたら「二人を取られた」と言わなくなりました。そのときは「うまいことを言ったな」と思ったのですが、その後、自分も勉強し、母親になって子どもを持ち「えらいことを言ってしまった」と悔やみました。

５１歳のとき「あしたば」という同人誌をつくり、そこに母をモデルにした小説「ほおずき」を書いて載せました。母の一周忌のとき本にしました。三兄は何も言わず５０代で亡くなりました。ただ、一つだけ聞きました。引き上げ船でまだ１０代なのに班長になり、亡くなった子どもを母親からもぎ取って水葬する役目をさせられたそうです。あとは何も語らなかった。何で聞かなかったのか。どんな風に帰って来たのか。兄のことを知りたくて引き揚げてきた人たちを訪ねて回りました。一番仲のよかった友だちのところに墓参りしました。尾鷲の人でお母さんにお会いしました。昭和２２年に亡くなったという通知が昭和２８年に届いたそうです。大台町に慰霊碑があり、そこで慰霊祭があることを教えられ、参加された義勇軍の人たちの話を聞くことができました。兄は通訳をしていた中国人の家に逃げてかくまってもらい、そこで働かせてもらって生きて帰れたということです。復員関係の県の女性の担当者を通じて、尾鷲の友人の最後を看取った軍医が長野県にいることが分かり、訪ねました。この女性の依頼があり、残量孤児の身元引受人を私のところでしました。

多くの体験者にお会いして聞いた話を「兄たちの青春」として「あしたば」に連載し本にしました。しかし、この題名は何ともそぐわない。絶版になってその後再版するとき、「贄舞」としました。生贄の祭壇から逃れようと必死にもがいている姿が舞いのように見える、と思ったのです。私の人生の後半は「鎮魂の旅」でした。きょうもそうです。まだまだ子どもたちに伝えないと・・・。もうひと頑張りしたいと思います。

【竹内　令さん】

竹内　令さんの略歴

１９３２年津市に生まれる。三重大卒業後、小学校教諭。１９７６年退職。１９８６年三重県文学新人賞（小説部門）受賞。２００８年清水信文学賞受賞。

市制７５周年記念展示会と講演会

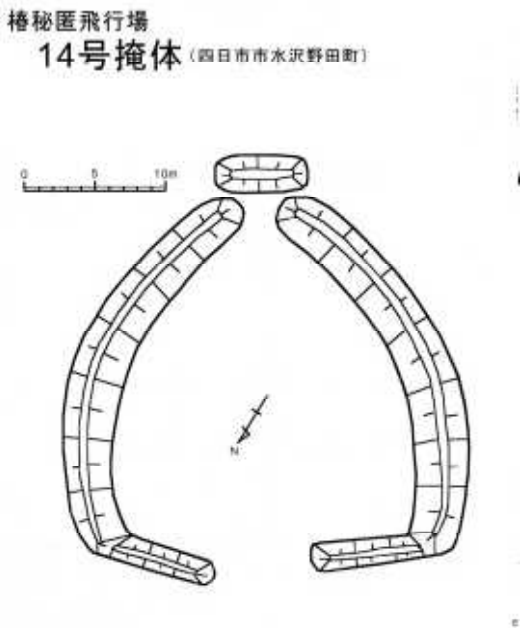
２０１７年１２月２日、深伊沢公民館
講師　；　浅尾　悟（元中学校教員）

今から７５年前の１９４２（昭和１７）年１２月１日、鈴鹿市が誕生しました。この日の前後に市民の会では戦争を語り継ぐ目的で各地で展示会と講演会を実施しており、今回は深伊沢公民館で開かれました。１１月２７日（月）より公民館通路で写真パネルを展示、多くの方の見学がありました。１２月２日（土）には講演会が開かれ、地元の方を中心に約６０人の聴衆が参加し、元教員の浅尾悟さんが「陸軍椿秘匿飛行場と掩体」という演題でお話しをされました。

椿秘匿飛行場は日本が本土決戦を想定して、敵が日本本土を攻撃してきた時に、特攻機などで迎え撃つための特攻用飛行場で、各地に造られた飛行場の一つです。１９４３（昭和１８）年秋頃から造られ始め、追分町の東名阪高速道付近を中心に東西２．１ｋｍ、南北１．８ｋｍ、幅１００ｍの十字形の滑走路は土を固めたもので、１９４４年末にはほぼ完成していました。また滑走路の周辺には戦闘機を待避する目的で土製の掩体が確認できるだけで７６箇所も造られました。掩体は幅１５～２０ｍ前後で、戦闘機１機が収納でき、高さ約１．８ｍ前後のＵ字形（馬蹄形）の土塁で造られています。

しかしこの飛行場は何回かの飛行試技があったことは確認されていますが、終戦まで１度も実践に使われたことのない飛行場でもありました。また、この飛行場と連動して、すでにあった北伊勢陸軍飛行場も戦争末期には飛行訓練場から実践飛行場に改編され、また掩体なども造られました。椿秘匿飛行場と北伊勢陸軍飛行場は誘導路で結ばれ、密接な関係にあったことがわかります。特に三畑にはコンクリート製の掩体が残されており、特殊な任務（指揮所など）を兼ねた掩体の可能性が高いと考えられます。

浅尾さんは、こういった特攻用飛行場が造られる目的や本土決戦の経緯を当時の戦時状況を踏まえて話されました。特に他地域に比べて、この椿秘匿飛行場の特徴として、あまりにも掩体の数が多いことで、この地方の中心的な特攻用飛行場としての機能をもたせようとしていた可能性があると指摘されました。また掩体の形状について、他地域の掩体が、円形やＵ字形であるのに対して、この椿秘匿飛行場の掩体はＵ字形の形状の後方にプロペラ機の風除けと考えられる虎口が開いており、この飛行場のみ見られる非常に珍しいものであると指摘されました。



現在、三畑のコンクリート製掩体は県内唯一のものとして国の登録有形文化財になっています、また土製の掩体は１２箇所が残存しており、戦争遺産の生き証人として早急なる保存措置が望まれます。最後の懇談の中で、地元・深溝の名村一義さんが掩体を造った体験を話されました（次ページに詳しく掲載）。

戦時体験聞き取り～椿秘匿飛行場掩体の造営体験～

お話を伺った方　**名村一義**さん（鈴鹿市深溝町、９０歳）

名村一義さんは１９２７(昭和２)年、鈴鹿郡深溝で生まれ、１９４５(昭和２０)年５月、防衛召集(充員召集)されて亀山の部隊に赴き、その一ヶ月後、正式に召集されました。同年８月２日の亀山駅付近の汽車銃撃事件では応援部隊として亀山駅現場に駆けつけたとの経験をもっています。終戦までは軍事訓練に明け暮れ、亀山鹿島の鈴鹿川河川敷にて投弾訓練やゲリラ訓練などを行っていたそうです。召集の前、１９４３(昭和１７)年秋ころ、陸軍設営隊は青年学校に通っていた男子に掩体造営の勤労動員を命じました。名村さんもその一人として参加し、椿一宮地区で掩体を造りました。

「掩体」とは飛行機を敵機の空襲などから避難するための施設で、滑走路から伸びた誘導路沿いに造られました。多くは土塁を「コ」の字、あるいは「U」字状に成形し、中に飛行機を格納し、上に木の枝などを置いて隠しました。中にはコンクリートで造られた頑丈な掩体もありました。太平洋戦争突入以後、徐々に追い詰められていた日本軍は本土で敵をむかい入れる「本土決戦」を強く意識するようになり、各地にそのための特攻用の飛行場を数多く造りました。この鈴鹿の「椿秘匿飛行場」もそのひとつです。

名村さんらが掩体造りを始めた頃にはすでに十字の滑走路がほぼできあがっており、１９４３(昭和１７)年になってからすぐに造り始めたと考えられています。「滑走路」はコンクリートではなく土を固めたもので、すべて手作業でしたが、終わりのほうでは南方で使っていたブルドーザーが導入されました。飛行場用地はすべて地権者からほぼ無償で軍が接収しました。このあたりは当時、山林がほとんどで、少し畑地がありましたが、誘導路の中にある私有地などへは耕作にいくことは許可されていたそうです。「滑走路」「誘導路」「掩体」は普段は切られた木などで覆い、「飛行場」として関知されないようにしましたが、４、５日で木は枯れ、何回か取り替えたそうです。

掩体づくりに何名の人が動員されたかは不明ですが、名村さんらが担当した掩体は椿一宮の県道１１５号線の北側の２基の掩体（掩体番号１，３）です。作業は８時半から４時半で弁当を持って行き、１つの掩体に２０～３０人が当たりました。現場では指揮を執ったのが陸軍の見習士官（荒木さんと松岡さん）で、部下の工兵（吉津さん）がまず現場測量して、杭と縄を張り、そこに土を盛っていきます。二人一組でモッコで掩体の外側から土を掘って運び土塁を造っていきました。「U」字形の土塁は約２ｍ程盛り、１基に約１ヶ月かけて造りました。見習士官は近くの深伊沢国民学校に寝泊まりし、他の軍人は現場に仮設のテントを立てて寝泊まりをしました。この飛行場を造った部隊は次に愛媛県今治の飛行場設営に向かいました。

この飛行場は未完成で実際に使われることはありませんでしたが、「新司偵」などの軍用機が離発着していたとの証言もあり、運用に向けて準備していたことが伺えます。戦後は何機かの飛行機が滑走路や掩体に残されていて、進駐軍が滑走路などで焼却処分されたそうです、その機体のゴミの一部が長沢新田のコンクリート囲い(弾薬庫跡か)の中（現：(株)サクライ北方）に投棄されていたことが名村一宏さんの証言で明らかになっています。戦後、この飛行場跡は元の地権者に戻されることはなく、軍用地から国有地とり、農地を希望する他県からの入植者に割り当てられました。一反あたり７５円で売却されなたそうです。最初は入植者の多くが芋を生産し、それはデンプンをとるためで、工業用アルコールなどにされました。

今回、大変貴重なお話を伺うことができました。

２０１８平和への祈り展

・日時　６月２９日(金)～７月１日(日)　１０時～２０時(最終日１９時)
・場所　イオンモール鈴鹿(ベルシティー)２階イオンホール(鈴鹿市羽山４－１－２)
・内容　パネル展（アンネ･フランク展）
講演会　「原爆のはなしを聞こう」（６月２９日１１時～、１４時～)、
「アンネ・フランクとホロコーストから学ぶ平和」（６月３０日１４時～)、
「平和の本の読み聞かせ」（７月１日１１時～）
鈴鹿市の戦争遺跡展示、パネル、戦時中の生活用品(代用品、空襲関係、衣料切符、通達類、教科書等)、軍関係品(鈴鹿海軍工廠、鈴鹿海軍航空隊関係品)、等
・主催　鈴鹿市、鈴鹿市教育委員会
・協力　「２０１８平和への祈り展」市民実行委員会、他

第５回　戦争遺跡親子見学会のご案内

夏休みの自由研究にいかがですか？

・日　時　２０１８年7月２９日（日）８時３０分～１２時
・集合場所　桜の森公園戦争遺産モニュメント前（鈴鹿医療科学大学正門付近）
・見学場所　鈴鹿海軍航空隊跡、鈴鹿海軍工廠跡、鈴空格納庫部材保管施設、他
・案　内　岩脇　彰さん（本会会員、小学校教員）
・参加費　１０００円（バス代及び保険代）
・定　員　２５名（定員になり次第締め切らせていただきます）
・その他　・マイクロバスにて移動します。駐車場は「桜の森公園」をご利用ください。
・小雨決行（雨天の場合は雨具を各自ご持参ください）
・原則、「親子」ですが、一人でもご参加いただけます。
・申込先　電話(ﾌｧｯｸｽ)かメールにて山門までお申し込みください。
電話（ファックス）　０５９－３８６－１７２５
メール　r-dolce@mecha.ne.jp

第２回　県外先進的平和ミュージアム見学会

・日　時　２０１８年１０月２０日（土）９時～１７時
・見学場所　愛知県内を予定（ピースあいち、見晴台高射砲陣地、半田市借宿など）
・鈴鹿から貸切バスにて移動、集合場所、参加費等は未定、詳細が決まり次第、お知らせいたします。

【発行】　鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会
代　表　竹内宏行、中森成行
〒 510-0254 鈴鹿市寺家１－２－４７
電　話　０５９－３８８－６５０８
メール　ta818hi@mecha.ne.jp
ＨＰ　http://www006.upp.so-net.ne.jp/asao/peacesuzuka.htm